農産物長期需給額の推計

唯是康彦

一　はじめに
(1)　推計の意義
(2)　推計作業の概観
二　牛産指数の組み替え
(1)　農産物需要
(2)　加工農産物の内訳
三　農産物の輸出入
(1)　戦前の輸出入
(2)　戦後の輸出入
四　農産物の消費額
(1)　推計上の諸問題
(2)　戦前の消費額
(3)　戦後の消費額
五　ひすび
(1)　要約
(2)　問題点

一　はじめに

(1)　推計の意義

農業経済を長期的・マクロ的に把握し、将来予測に備えることは、いうまでもなく、重要なことであるが、今日、この要望に答えうる資料がいくつ存在しているかは甚だ疑問である。まず第一に、この要望に答えるためには、戦前と戦後との間に断層があったかどうか、仮りにあったとすれば、それはどのようなものであったかを明確にしておかなくてはなるまい。第二に、第一の要望に答えるためには、(イ)　農業と非農業との間、(ロ)　農業内部の商品相互の間、および(ハ)　農産物の生産と消費との間に斉合性のある分析が要望されることになるであろう。以上の要望

を考えるとき、一貫した方法によってこれに答えられる資料というものは今日のところ、まず存在しないといっても過言ではあるまい。

この種の資料を考えるとき、まず思い浮かぶのは大川一司氏を中心としてなされた一群の作業のことであるが、[1]作業の重心が戦前に置かれていたため、今日的な意味で、そのまま戦前・戦後の比較をするようには仕組まれていない。また、作業が幾人かの手によって、断続的に行なわれたために、必ずしも一定の方法論によって、相互に斉合性を保っているとは限らない。ここにこれら一群の資料の弱点があるように思われる。

たとえば、大川氏の推計は明治一一年までさかのぼって行なわれたが、それだけに推計というよりは推定の部分が多くなり、疑問が提起されている。[2]しかし、戦前・戦後の比較という観点からすれば、この部分は重要でないことはないが、比較のすべてを決定するというものでもない。

中山誠記氏は、農業生産額に関する大川氏のこの点の不備を指摘され、新推計を提出された。[3]これはこれとして優れた作業であるが、明治一一年時点にまでさかのぼってしまえば、問題は余り大きくは解決しないのではなかろうか。昔にさかのぼるほど、脱落品目はふえてくるが、大川氏がこの部分の補塡に、比較的資料の整備された新しい時点での品目構成比率を使用されたのに対し、中山氏はできる限り品目を資料からひろった後は、新しい時点の資料をトレンドで過去へ延長して、欠如部分を埋めているのである。したがって、方法論的には余り大きな開きがあるとは思えない。明治時代の初期から中期にかけては、常識的な意味での歴史学の分野に属することである。ここで重要なことは、数字を機械的にいろいろ操作することではなく、文献を渉猟することによって欠如している数字ないしはそれを推計しうるような有力な傍証を実際に発見することである。その結果、構成比率がよいか、トレ

ンドがよいか、あるいは別の方法がよいかが判断されるのではなかろうか。

中山氏の大川氏批判のもう一点は、大川氏の実質生産額が、ラスパイレス方式による価格指数をデフレーターとしている点にある。これに対して、中山氏はパーシェ方式の価格指数をデフレーターに採用された（実際にはインプリシット・デフレーターという形式である）。中山氏のとられた方法の方が分析上、一般的に良好な結果をおさめるので、今日では統計作成はこの方式の方へ転換しつつある。[4] 中山氏の作業の結果、両者の差はかなりはっきりとあらわれているし、その原因の大部分が大川氏の不完全な価格指数に帰せられることも明らかなようである。ただ、大川氏の採用されたのは卸売価格であり、中山氏のは農場価格であるため、卸売段階の附加価値部分の影響が前者に混入しており、単なる不完全性だけによる差ではないことに注意する必要があろう。

しかし、このような両氏の差は時代的制約ともみられる。大川氏の生産額推計より後に、大川氏との関連でなされたと思われる梅村・山田両氏による農業固定資本の推計[5]は既にインプリシット・デフレーターを採用されておられる。それよりも、大川氏の農業生産額の推計以前に、農林省では農業生産指数の計算にインプリシット・デフレーターを採用し、明治一一年以降の推計を行なっている。[6] 大川氏がこの指数にほとんど触れられることなく、生産額推計をなされた点の方がむしろ不思議である。また、農林省の生産指数はインプリシット・デフレーターによっているから、中山氏の推計方法とも全く同じで、中山氏の推計の意義は古い年次のトレンド推定の部分だけということになってしまうであろう。

ところで、農林省の生産指数はその後、幾度か改訂をへて、今日では昭和三五年基準の指数が昭和三〇年以降について作成されている。[7] この指数が従来の指数と違っている点は中間生産物と在庫調整とを考慮している点にある。

中間生産物はここでは農家が自給する播種量と飼料とのことであり、農業全体としてみれば、これらはそのままでは二重計算となるので、控除されなければならない。在庫調整は農産物を生産の観点でとらえれば、どうしても含められねばならないが、ここでは動物と永年性植物とだけについて考慮されている。もちろん、在庫調整は農産物のすべてについて考えられてよいのであるが、耕種作物の多くは年内に生産を完了するものが多いので、無視されているわけである。

さて、中間生産物と在庫調整については、大川氏も中山氏も全然考慮を払われていない。大川氏の場合は前述の梅村・山田両氏の農業固定資本の推計と速水佑次郎氏の農業投入財の推計[8]（ラスパイレス方式の価格指数をデフレーターとしている）とをそのプロジェクトに包含しているわけだから、当然、その配慮があってよいのであるが、作業順序が時間的に逆なためと推計作業の困難なためとで、この点は断念しておられるようである。

もっとも、現行の農林省の生産指数の場合、在庫調整は消費と分離し難い形でなされているので、農産物消費の推計を行なうに当って、生産指数から出発すると、不便が発生するのも事実である。しからば、大川氏および中山氏の農産物消費額の推計はいかなるものであろうか。この部分の推計は手順としては両氏とも極めて単純である。すなわち、国内生産額に輸出入額を考慮して消費額としているのである。この場合、大川氏はラスパイレス方式の価格指数を、中山氏はパーシェ方式の価格指数をそれぞれ輸出入額のデフレーターとしているのである。したがって、国内生産額はすべて原料形態なのに、輸出入額は原料形態と加工形態とが混合したまま、しかも卸売価格ないし農場価格で評価された国内生産額に、輸出入価格評価の輸出入額を差引きないし合算しているのである。更に、大川氏は糸類関係の貿易を無視されたし、中山氏は消費額の推計を食料農産物に限定された。農産物の消費形態が

原料形態を多くとった戦前の場合では、このような処置はある程度許されるとしても、戦前・戦後の比較から未来を望見しようとするときには、加工農産物の分離は是非、必要になってくる。また、仮りに問題意識が戦前だけに限定されていたとしても、商品消費のできるだけ細い仕訳は分析上必要になってくるはずである。

さて、農産物消費の資料については他にいかなるものがあろうか。少なくとも食料だけについていえば、戦後は農林省官房調査課『食糧需給表』がある。しかし、目的が栄養摂取量の推計にあるので、野菜・果実・肉類・酪農は原料段階で把握され、加工品の分離がない。また農産物全般については同省同課『農業および農家の社会勘定』があるが、これも原料形態に力点がかかっている。生産から消費へという経路を、直接消費と加工消費へと仕訳しながら追跡するコモディティ・フロー方式の統計として最も完全な形をもっているのは篠原三代平氏の作業[9]と『産業連関表』であろう。ただ、残念ながら戦前に限定されたり、計測年数が極めて少なかったりして、完全利用の段階にあるとはいえない。つまり、農産物消費の統計は農産物生産の統計にくらべて、はるかに不完全な状態のままにあるということができよう。われわれの資料作成の作業は上述諸先輩の諸成果を前提にしながら、それをわれわれの最初にかかげた目的に合うように一歩でも前進させようとするものである。

(2) 推計作業の概観

以上のような観点に立つからには、生産から消費にいたる一切の資料を相互に関連させながら、相当長期間にわたって作成することが急務となってくる。まず推計期間であるが、ここでは明治四二～昭和一五年および昭和二五～四〇年の四七年間がえらばれた。明治四二年を出発点としたのは、野菜類を始めとして、今日重要と思われてい

る商品がほとんど出揃う年だからである。これ以前は先にも述べたように、推定の領域が余りにも大きくなってくるので、今回は故意にさけたわけである。しかし、戦前、三一年間の資料があれば、戦後との比較は充分であろうと考えられたのである。また、昭和一六〜二四年がさけられたのは、いうまでもなく、戦争の影響は当面の課題でないからである。更に、この期間は再び資料が欠如してくるからである。

次に、実質額評価のための基準時点であるが、これは昭和三五年が採用された。この点については余り深い意味があるわけではなく、現在の官庁統計の多くが昭和三五年を基準にしているので、それに合わせたにすぎない。将来予測をすることが最終目的であれば、比較的最近を基準とすることはよいが、昭和三五年でなければならない理由はないし、また数年間の平均価格をとってもよいだろう。したがって、昭和三五年基準に関する理論的根拠は薄弱である。

ただ、結果論であるが、昭和三五年は基準としてはそんなに悪い年ではない。諸物価、特に生鮮食料品が急騰したり、生産者米価と消費者米価とが逆ざやになったりするのは、むしろこれ以後である。そういう意味では、昭和三五年という年の価格体系は比較的安定していて、戦後はもちろん、戦前をも結びつけるのに、比較的良いウエイトとなっているようである。

最後に、推計する分野は農業生産額・土地・労働・農業固定資本額・農業投入額（投資額および経常投入額）・農産物輸出入額・農産物消費額およびこれらに関連した諸価格指数ということになろう。このうち、農業生産額については現行の農林省の生産指数を戦前までに拡張するという形で、既に他誌に発表している。[10] 生産要素の保有額および投入額、それから各種価格指数については、生産指数の計算にある程度必要なので推計されているが、全面的

には未発表であるし、今回も発表する段階にいたっていない。次の機会にゆずりたいと思う。したがって、ここでは輸出入額および消費額の推計が中心となるわけである。これは先述したように、農産物の既存の諸資料のなかで最も弱い部分なので、この推計は他と切り離して、これだけでも充分意味があると思われるのである。

注(1) 大川一司編『日本経済の成長率』(一九五六年、一橋大学経済研究叢書7)。梅村又次・山田三郎「農業固定資本の推計」(『農業総合研究』第一六巻第四号)。速水佑次郎「わが国農業における経常財投入量の推計」(『農業総合研究』第一七巻第四号)。

(2) S. I. Nakamura, *Growth of Japanese Agriculture, 1871~1920, The State and Economic Enterprise in Japan*, 1965, chap. VI.

(3) 中山誠記『食糧需給の長期成長分析』(『農業総合研究』第一〇巻第四号)。

(4) たとえば経済企画庁編『国民経済計算の改善に関する方策』(昭和三八年)。

(5) 前掲論文。

(6) 農林統計協会『農林水産統計月報』(昭和二一年五月)。

(7) 農林省統計調査部『部昭和三五年基準農林水産生産指数』。

(8) 前掲論文。

(9) 篠原三代平「一九〇九―四〇年間における食糧消費支出の一推計」(『経済研究』第一二巻第一号)。

(10) 拙稿「農業生産指数の推計」(『一橋論叢』第五六巻第五号)。

二　生産指数の組み替え

(1) 農産物需要

農産物の需要はいろいろの方面からなされている。しかし、これを大別すると、原型をとどめたまま最終的に消費されるものと、加工品の原料として消費されるものとに二大別されるだろう。仮りに前者を直接消費需要（以下

では略して直消需要と呼ぶ）、後者を加工需要と呼ぶことにしよう。また、別の観点からすると、農産物は食用として需要されるものと、非食用として需要されるものとがある。非食用需要は更に農業用と非農業用（以下では工業用と略称する）とに分類されるだろう。農業用というのは農業投入財として利用される場合のことである。以上の二種類の分類基準を組み合わせると、農産物需要は次のような図式によってあらわすことができるであろう。われわれはこの図式に合わせて農産物の仕訳をする必要がある。

農産物需要の図式

- 農産物
  - 直消
    - 食用
    - 非食用
      - 工業用
      - 農業用
  - 加工
    - 食用
    - 非食用
      - 工業用
      - 農業用

ところが、この図式による仕訳を貫徹することは実際上、かなりの困難がある。同一農産物はほとんどが直消と加工に分離されるほかに、食用と非食用に分割されることは事実であるが、大抵の場合は食用か、非食用かいずれかに大部分が需要され、他は微少にとどまることが多い。そのために、微少部分の利用に関してはややもすると記録もれが生じ、資料を欠くことになるのである。したがって、かなり長期間にわたって先の図式に沿った推計を遂行することは、資料の上で挫折する恐れが存在するわけである。そこで、前記図式はあくまでも理想的なものとして考え、ここで実際に利用したのは次のような図式であった。

農産物需要の略式

- 農産物
  - 食用
    - 直消
    - 加工
  - 非食用
    - 工業用
    - 農業用
      - 直消
      - 加工

このような略式を使用したとしても、農産物の仕訳が容易になるわけではない。食用・非食用という分類を先行させたために、かえって仕訳がむずかしくなる場合もある。たとえば、糖蜜とかはっか油・はっか脳は食用・非食用いずれにも使用される。また、煙草や薬用にんじんは食用・非食用いずれに属するとすべきなのか必ずしも分明ではない。更に、直消と加工との分類もまたむずかしい。具体的にはいかなるものでも流通過程で多少の加工はほどこされるものとみなくてはならない。しかし、ここで問題となるのは、そのような理論的一貫性ではなく、加工品の資料が長期的にどの程度入手しうるかという点にかかっている。この部分の不完全性は加工品の推計のみならず、直消部分の推計にもはねかえってくるからである。

以上のような実際上の困難はあるが、われわれとしては可能な限り推計を押し進めなくてはならない。その場合、農産物の生産から消用へいたる道順に沿って作業をするのがよいと思われるので、既に他所で発表した農業の生産指数を本作業の出発点として採用することにする。

農業の生産指数の分類は第1表に示されている通りである。資料が戦前にとられて戦後はとられなくなった品目や、戦後であっても昭和三五年以後に急増した品目は当然、脱落している。[1] しかし、今回の作業ではそのような品

第1表 生産指数採用品目

大分類	中分類	小分類	品目名	備考
耕種	米		米	
	麦類		小麦,六条大麦,二条大麦,裸麦,えん麦,らい麦	
	雑穀		とうもろこし[1],あわ,ひえ,きび,もろこし,そば	1)乾燥
	豆類		だいず[1],えんどう[1],そらまめ[1],いんげん[1],あずき,ささげ,りょくとう,らっかせい	1)乾燥
	いも類		かんしょ,ばれいしょ	
	野菜	果菜類	とうもろこし[1],だいず[1],えんどう[1],そらまめ[1],いんげん[1],きゅうり,しろうり,かぼちゃ,すいか,なす,とまと	1)未成熟
		葉菜類	きゃべつ,結球はくさい,非結球はくさい,ほうれんそう,ねぎ,たまねぎ,たけのこ	
		根菜類	だいこん,かぶら,にんじん,ごぼう,さといも,れんこん	
	果実		みかん,ネーブルオレンジ,なつみかん,雑かん,りんご,ぶどう,日本なし,西洋なし,もも,おうとう,びわ,うめ,かき,くり	
	工芸作物		なたね,ごま,さとうきび,てんさい,こんにゃく いも,たばこ[1],茶,じょちゅうぎく,はっか,あさ[2],あま[3],こうま,ラミー,い,しちとういこうぞ[4],みつまた,やくようにんじん,わた,へちま,こうりやなぎ,あい,はぜ	1)生葉 2)皮麻 3)乾茎 4)黒皮
	その他		植物成長,わら	
養蚕	まゆ		上繭,玉屑繭,種繭	
畜産	乳用牛		乳用牛[1],とく	1)資本形成のみ考慮され,廃畜は含まれない。
	肉用牛		肉用牛[2]	
	豚		豚[2]	
	食鶏		廃鶏ブロイラー	2)廃畜のほかに在庫変動が含まれている。
	鶏卵		鶏卵	
	生乳		牛乳	
	その他		馬[1],めん羊[2],やぎ[2],うさぎ,羊毛,兎毛,やぎ乳	

目の採用は考えないことにする。問題はむしろ生産指数の分類基準にある。この分類基準はあくまでも生産だけを念頭においてなされたものである。したがって、前述した農産物需要の図式にそのまま合致するものでないことは一見して明らかである。第一に食用・非食用という観点からするならば、工芸作物という項目は改組されなくてはならない。同様の問題は畜産のなかの「その他」についてもいわれるだろう。

第二に、畜産のうち、乳用牛と馬とは専ら資本形成部分およびその仕掛在庫部分だけの推計しか行なわれておらず、廃牛・廃馬の肉や皮部分の推計は全然なされていない。また、肉牛・豚・めん羊・やぎについては肉および皮としてのとり扱いがなされているが、屠殺部分と仕掛品を含めた在庫部分の分割、および肉部分と皮部分との分割が行なわれていない。したがって、われわれにはこれらの動物の需要の観点に立った仕訳と、それに対応した推計とが必要になってくるのである。

第三に加工品との関係で、その原料として新たに農産物に追加すべき品目が若干でてきた。主なものはばっかん真田、ビール原料としてのホップ、採油用種子としての棉実・あまに・油桐・オリーヴなどであるが、これは主として戦前において重要である。しかし、農業生産全般からみると余り大きなウエイトは持たない。これより大きなウエイトのあるもので脱落しているものはいくらでもあげられる。ではなぜこのような処置をしたかというと、油脂原料として国産のものはだいず・らっかせい・ごま・なたねぐらいで、いずれも食用油の原料である。したがって、食用・非食用という分離をした以上、工業油原料の国産は皆無になってしまうので、その対抗上、あまに以下の品目をあげておいた。また、これらがあげられると、食用油原料としての棉実の国産も無視できなくなり、採用することになったのである。それゆえ、これらの追加は分類形式のバランスに由来しているとみられよう。

第2表 生産指数分類の変更

大分類	中分類	品目名
食品原材料	米	従前通り
	麦類	従前通り
	雑穀	従前通り
	豆類	従前通り
	いも類	こんにゃくいもを追加
	野菜	従前通り
	果実	従前通り
	砂糖	てんさい，さとうきび
	採油用種子	ごま，なたね，棉実*
	嗜好飲料	茶
	煙草	葉たばこ
	肉類	乳牛*，とく，肉牛*，豚*，馬*，めん羊*，やぎ*，うさぎ，廃鶏，ブロイラー
	生乳	牛乳，やぎ乳
	鶏卵	鶏卵
工業用原材料	採油用種子	あまに*，油桐*，オリーヴ*，はぜ
	薬用農産物	はっか，やくようにんじん，ホップ，あい，じょちゅうぎく
	雑品	い，しちとうい，へちま，こうぞ，みつまた，わら，ばっかん真田*
	麻類	あさ，あま，こうま，ラミー
	棉	わた
	まゆ	上繭，玉繭
	羊毛	羊毛
	獣皮毛	と毛，牛皮*，馬皮*，豚皮*，めん羊皮*，やぎ皮*
農業投入財	種子	米，麦類，雑穀（きび，もろこしを除く），豆類，なたね，ごま，さといも，種卵，種繭
	飼肥料	米，麦類，雑穀，豆類，牛乳，緑肥作物*
	在庫	肉牛，豚，めん羊，やぎ
	固定資本	果樹，桑，茶，こうりやなぎ，はぜ，こうぞ，みつまた，ラミー，乳牛，馬，肉牛*，めん羊*，やぎ*，種豚*，種鶏*

注．* は新たに追加される品目または数箇に分解される品目．

第四に、食用と非食用との区分があくまでも便宜的なものであることは既に述べたところであるが、それにしても飼料および種子は農業投入財として分離される必要があるだろう。中間生産物として予め、生産指数から控除されている部分のほかに、一旦、農外部門に販売されてから、再度購入されるものもこの中に含められるべきである。

以上の点を考慮して第1表を組み替えると、第2表のようになるだろう。

(2) 加工農産物の内訳

一国の農産物の総供給量は通常、生産量に期首在庫および輸入を合算し、それから期末在庫および輸出を差し引いて求められる。前述の生産指数品目の仕訳に基づいて以上の操作をすれば、農産物の総供給量がえられる。しかし、資料に需要としての性格を与えるためには、更にその総供給量が直消原料と加工原料とに分割されねばならない。ところが、加工品を考えると、加工品の輸出入や在庫を考慮せぬことには、その最終需要には到達しない。とすると、農産物需要は原料形態のみならず、加工品を媒介して間接的に在庫変動を示したり、輸出入に現われたりすることになる。この加工の側面をどのように扱ったなら、われわれは最も望ましい農産物需要額の資料が求められるであろうか。

まず第一に考えられる方法は加工品をすべて原料へ換算してしまうことである。このようにすれば、農産物需要は農場段階で、いささかの変形も不純物もなしに推計されることができるはずである。ところが、この方法が可能なのは封鎖体系においてのみである。一旦、閉放体系になると、甚だ不都合なことが発生する。たとえば、だいず油の輸入を考えてみよう。これを原料であるだいずへ換算することは容易である。ところが、だいずは油の採集に

当って副産物として粕を生産する。したがって、だいず油の輸入をだいずの輸入に置きかえた場合には、輸入した覚えのないだいず油粕も輸入したという結果をもたらすことになる。

これを避けるために、だいず油のだいず換算率を粕に相当する分だけ下げるという方法が考えられるが、この下げ率自体はそれほど明確な基準はないから、恣意性をまぬがれないことになってしまう。また、こうまでして、原料換算にこだわれば、最終需要の油および粕の需要状態が歪められてしまい、結局、その派生需要のだいず需要も歪んでしまうことになろう。したがって、加工部門の附加価値が混入するにしろ、生産から加工をへて消費にいたる変形の過程を素直に記述することの方が、所詮は望ましい結果をもたらすことになるだろう。この種の資料として最も完全な姿を保っているのは『産業連関表』である。しかし、これは既述のように、現在のところでは長期的なシリーズにはなっていない。そこで、次には、産業連関表ほど克明でなくとも、農産物の直消需要と加工需要とが大摑みにでも把握できるような資料を整備するということが課題となる。ここでとった方法はそのような方向なのである。

この方向へ進むためには、まず加工農産物の資料をどの程度そろえることができるかということを明らかにしておかねばならない。国産の加工農産物は農産物の総供給量のなかから原料を購入する。残った部分は直消農産物の需要量ということになるのである。他方、国産の加工農産物はその在庫と輸出入との考慮によって、国内需要量を推計させる。このような観点に立って、推計可能な品目の一覧表を第3表にあげておいた。

この表について注意すべきことは、まず第一に、加工基準を原則として第一次加工に限定したことである。したがって、たとえば、小麦粉は加工品としてあがっているが、それの第二次加工であるパンやめんなどの品目へ細分

第3表 農産物の最終需要分類

大分類	区分	中分類
食用	直消	米，麦類，雑穀，豆類，いも類，野菜，果実，肉類，生乳，卵類
	加工	穀粉及び澱粉，加工野菜，加工果実，調味料，糖類，植物油，酒類，嗜好飲料，煙草，乳製品，加工肉
工業用		植物油，薬用農産物，雑品，麻糸，綿糸，生糸，毛糸，獣皮毛，獣脂
農業投入用	自給	種子，自給飼料，自給固定資本
	購入	単体飼料，糖類，粕類，動植物

注．中分類の内訳品目は第7表の単価表参照．

されることはない。酒精についてもその原料である乾かんしょと糖蜜の段階でとどまっている。とはいっても、輸出入の場合にはこの原則は必ずしも守られてはいない。というのは、輸出入に関しては農産物需要とは別に、これだけで完結した資料にしたいという要求があったためである。したがって、第二次加工品も輸出入に関しては採用されているのである。

第二に、かなり強引な分類基準が採用されている。これは加工の定義を第一次加工に限定したために、輸出入における第二次加工品が第一次加工品の分類へ仕訳されたことがその一つの原因である。チョコレートが嗜好飲料へ分類されているのはその実例である。いま一つの原因は余り細かい分類はかえって全体の把握を混乱させるという立場から、簡潔性を重んじたためである。たとえばとうふが穀粉かよび澱粉の項に含められたり、本来なら直消へ分類されるべき香辛料が調味料へ分類されているのなどはその実例とみることができる。もっとも、これらの分類は今後、まだ変更される可能性はある。

第三に、輸出入の資料にある程度の独自性をもたせたために、

国内生産量と対応しない品目が現われてきたことである。これは国内生産が皆無なのではなく、微少なためか、調査不充分のためかによっている。現在のところ資料をそろえることが不可能な場合は、輸出入超過の場合に限り、その差額を、また輸出超過の場合および輸入のみの場合には、輸入金額を国内需要に計上することにした。したがって、輸出のみの場合はどこにも加算されないことになる。需要統計とは別に、加工品の国産統計を作成する場合は、当然、それに算入されてよいはずであるが、原料との対応関係が充分ではないので、今回は落すことにしてある。いずれにしろ、これらの部分は全体としてみれば余り大きな問題ではないであろう。

第四に、注意すべきことは工業用需要はすべて加工需要としたことである。といっても、ほとんどのものが、加工されているから問題にならないわけである。ただ、あい・こうりやなぎ・こうぞ・みつまたは加工資料がえられないために、原料形態のまま計上されているし[2]、薬用にんじんも国産に関しては土根風乾で評価されているなど、実際には加工の処理をしていないものが含まれている。

第五に、以下の推計では農業投入用のうち直消形態はとり扱わないことにした。数量推計自体はできているのであるが、この部分は後日、農業の生産要素の全般的な推計をやるときに一括して述べたいので、今回は省略することにした。ただ、加工部分については食用ないし工業用需要の推計との関連で求められるので、今回も推計を行なうことにした。その際、原料形態で輸入される飼料もこれに含めて推計することにする。農業投入財の購入部分のうち、農業部門によってその原料を供給するものがこれで大体、推定することができることになろう。

最後に、固定資本に関する生産指数の定義および評価方法は甚だ不満足であるが、それについても他日を期することとし、ここでは特別にとり扱わないことにする[3]。

注(1) 拙稿前掲論文参照。

(2) こうぞ・みつまたはそれの紙料化率まで入手したのであるが、この紙料が一般の紙にどのように編入されているかが分らないため加工過程の追求は断念された。

(3) たとえば、肉牛・やぎ・めん羊を全面的に肉だけとみなし、その固定資本的な側面を見落している点である。また、採卵鶏を固定資本とみていない点にも問題が残るだろう。

三　農産物の輸出入

(1) 戦前の輸出入

農業の生産額に関する推計はその需要の性格に合致したように組み替えられ、幾つかの項目が追加されたわけであるが、その結果は既存の生産指数を余り大きく変更するものではないので、修正後の値をここに掲載することはしない。前述の第3表のような仕訳にいたるための次の作業は輸出入額の推計ということになろう。ここでも食用・工業用・農業用の区分が必要であるとともに、そのおのおのが原料と加工品という分類をもつこととなる。ここで、直消の代りに原料という言葉が使われるのは、原料形態で輸入される農産物は直接消費されるばかりでなく、加工原料ともなるからである。以上の仕訳を第2表、第3表を前提しつつ示すと、第4表のようになる。

ところで、輸出入額の推定に当っても、生産指数と同様にパーシェ方式の価格指数を利用することになる。基準年次は昭和三五年である。したがって、輸出入額の実質額を求めるためには、各品目の数量系列を求め、これに各品目の昭和三五年の輸出入単価を掛け、第4表の分類に従って集計すればよいことになる。資料は大蔵省『日本外国貿易年表』によればよいから、ぼう大な作業量の点を除けば、推計はいたって単純ということになろう。しかし、

第4表 農産物輸出入の分類

大分類	区分	中分類
食用	原料	米，麦類，雑穀，豆類，いも類，野菜類，果実類，肉類，鳥卵，葉たばこ，採油用種子
	加工	穀粉および澱粉，加工野菜，加工果実，調味料，糖類，植物油，嗜好飲料，酒類，煙草，加工肉，乳製品
工業用	原料	薬用農産物，採油用種子，棉，麻，その他植物せんい，まゆ，羊毛
	加工	薬用農産物，植物油，雑品，麻糸，綿糸，生糸，毛糸，獣皮毛，獣脂
農業投入用	動物及び植物	単体飼料，糖蜜類，粕類

注．中分類の内訳品目は，第5，6表の単価表参照．

推計上、戦前と戦後との間には相異もあるので、一応分けて説明することにする。

戦前については、戦後と違った大きな問題がある。それは旧植民地との間の貿易である。通常、われわれは輸出入と区別して移出入と呼んでいるのがこれである。これをみるためには各総督府の『朝鮮貿易年表』、『台湾貿易年表』などをみればよいのであるが、樺太や関東州や南洋委任統治などにまで手を拡げて、細かい品目をひろっていくのは大変な作業になってしまう。したがって、ここでは移出入に関しては特別の場合を除いて朝鮮と台湾だけに限定することにする。また、こうしてもまず大きな間違いをきたさないものと思われる。

次に朝鮮と台湾だけに対象を限っても、移出入を品目ごとの合計値でとらえるならば、まだ問題は残っている。なぜなら、その合計値の中には本国との貿易とのほかに、植民地同志の貿易も含まれているからである。砂糖などはこの点が著しい。しかし特別の場合を除いては、ここでも植

民地貿易は本国との間で最も大きく行なわれたのであるから、合計値をとっても一般には大過ないものと思われる。

最後に、戦前と戦後とを一貫して分析する場合、移出入を一般の輸出入に含めてさしつかえないかどうかという問題が残る。現実的には、戦前のわが国経済は植民地を含めた一つの経済圏の上に成り立っていたのであるから、これを一般の貿易と同質のものとみることのできないのは当然である。しかし、戦後の状況は戦前のそれにくらべてはるかに厳しく、この厳しさが今後も続き、その上にわが国の経済を考えていかねばならないとすれば、このような状況が戦前から存在していたのだという仮定のもとに、移出入を一般の輸出入と同一視して処理するのも一つの態度のようである。したがって、ここでは輸出入と移出入との合算数量に昭和三五年価格を掛ける方法を採用した。したがって、旧植民地の貿易における効果はこの方法ではパーシェ方式による価格指数の方に現われることになるだろう。もちろん、このとり扱いは第一次段階のもので、次の段階では植民地を別立てとした処理が望まれることになるが、それは他の機会を待ちたいと思う。

次に推計期間は明治四二～昭和一五年ということであったが、戦争の影響で、昭和一四年ないし一五年以降の統計は不明のものや異常なものが出てくるので、実際問題としては昭和一三年どまりということになってしまった。資料は昭和八年までは東洋経済新報社『日本貿易精覧』があるので各統計表を毎年調べるという必要はない。ただ、これらの統計は金額のみで数量のない項目があったり、項目の内訳のないものがあったりするので、数量系列を品目ごとにできるだけ多く集めようとする今回の方法には不便な状態にある。このような場合、農商務省ないし農林省の作成になる各種の「要覧」[1]は「貿易月表」によっているので、かなり詳しい数量系列を押えることができた。ただし、この値は必ずしも「年表」の値と一致していない場合があるし、また大正元年以降から整理されていて、

それ以前の数字を欠く場合もあった。その反面、前述した移出入の問題が整理されている場合もあるので、結局、「要覧」で分る限りはこれによることにした。

数量系列のある品目に関して、すべてが昭和三五年単価を有しているとは限らない。戦前と戦後とでは資料の分類も変っているし、貿易そのものの在り方も変っているだろうから、当然、戦前には把握できて、昭和三五年には発見できない品目がいくつか存在し、それらは実質化の計算の第一次段階では、はずさざるをえなかった。乾かんしょ・みかんの輸移入や天然藍の輸移出はこれに相当する。

以上のように、数量系列がありながら、単価のないために脱落したり、系列が途中で切れているためにはずされたり、もともと金額のみあって数量のないものについては、金額の合算には含め、それを数量系列と単価との完全な品目で作ったパーシェ価格指数でデフレートして、その分類全体の実質化を計った。

なお、このパーシェ価格指数を作るためには、第4表の分類では数量系列が不足するので、たとえば、パイナップルのかん詰を生果と一緒にして価格指数を作り、後からパイナップルのかん詰を加工果実にして分離したといったような方法がとられている。まゆと生糸、および各種畜産物の輸移出入、原料野菜と加工野菜、および薬たばこに紙巻たばこの輸移出もこの例に属している。

鳥卵の輸移入に関しては、戦後のそれが種卵の輸入で、戦前と内容的に違うから、鳥卵の昭和三五年の輸出価格を戦前の鳥卵輸移入へ適用しておいた。

最後に、穀類・豆類・油脂類・油粕類については、『穀物要覧』および『工芸作物要覧』より数量系列をえたが、系列が断続するので、輸移出入には採用されなかったものがあるが、消費の数量系列を算出する場合には、それら

第5表A　輸移入単価表（戦前用）　（単位・トン当り円）

食用 分類	品目	単価
原料		
米		48,435
麦類	大麦	43,370
	小麦	23,774
	えん麦	27,412
雑穀	あわ・ひえ・きび し	28,000
	とうもろこし	21,551
豆類	だいず	34,280
	あずき	40,660
	えんどう	36,870
	そらまめ	33,728
	その他	37,809
果実類	バナナ	55,966
	パイナップル	69,905
葉煙草	葉たばこ	721,735
採油用種子	なたねま	46,705
	なこ	71,628
肉類	牛肉	199,648
鳥卵	鳥卵	188,928
加工		
加工穀粉及び澱粉	小麦粉	32,439
	いも澱粉	249,473
	タピオカ澱粉	30,559
加工野菜	干筍	138,662
加工果実	パイナップルかん詰	133,351
糖類	砂糖	31,184
植物油	棉実油	126,424
	大豆油	118,556
嗜好飲料	茶	492,293
酒類	コーヒー	292,076
	ぶどう酒 (l)	355
	ウイスキー (l)	820
	シャムパン (l)	873
	その他酒類 (l)	378
加工肉	ハム及びベーコン	495,655
乳製品	バター	325,300

工業用 分類	品目	単価
原料		
採油用種子	えごま	51,959
	棉実	32,213
	コプラ	72,265
薬用農産物	ホップ	471,531
	薬用人参	3,065,000
棉	綿及び繰綿	208,533
麻	亜麻・芋麻・及びラミー	168,464
	大麻黄麻マニラヘング	113,258
その他植物繊維		73,958
繭	まゆ	10,392,000
羊毛	羊毛	500,724
獣皮毛	山羊毛及び駱駝毛	1,284,653
	豚毛	1,685,832
	その他獣毛	10,771,000
	牛皮及び水牛皮	144,029
	その他獣皮	258,279
	阿膠	115,979
	象牙	2,325,127
加工		
植物油	椰子油	78,104
	ひまし油	50,000
薬用農産物	糖蜜	8,831
	乳糖	84,336
雑品	麦かん真田	126,671
生糸	生糸	2,363,522
獣脂	牛脂	57,866
	ステアリン	128,094
	オレイン	137,538
農業投入用		
動物及び植物	牛（1頭当り）	102,450
	馬（1頭当り）	3,326,114
糟糠類	ふすま	21,860
	獣骨	21,028
単体飼料	こうりゃん	18,938
粕類	だいず粕	50,000

第5表B　輸出単価表（戦前用）

（単位：トン当り円）

食用

分類	品目	単価
原料		
米		84,724
麦類	大麦	44,105
	小麦	28,051
豆類	だいず	93,481
	らっかせい	108,000
	その他豆類	103,979
いも類	ばれいしょ	20,406
野菜類	たまねぎ	18,122
	椎茸	1,421,806
果実類	みかん	67,234
	かんきつ類	57,413
	りんご	45,684
煙草	葉たばこ	306,749
鳥卵	鳥卵（からつき）	188,928
加工		
穀粉及び澱粉	小麦粉	27,925
加工野菜	切干大根	80,055
	たくあん	43,955
	蔬菜漬物	216,207
調味料	みそ	59,288
	しょう油	(l) 98
糖類	砂糖	37,389
植物油	だいず油	93,186
	なたね油	169,649
嗜好飲料	茶	200,540
酒類	清酒	(l) 246
	ビール	(l) 81
煙草	紙巻煙草	1,222,000
乳製品	コンデンスミルク煉粉乳計	422,455

工業用

分類	品目	単価
原料		
薬用農産物	除虫菊	37,170
	薬用人参	4,419,114
まゆ	まゆ	1,433,900
加工		
植物油	亜麻仁油	128,545
	木ろう	164,653
薬用農産物	はっか油	2,750,304
雑品	麦かん真田	244,833
	花莚	112,063
	へちま	910,725
綿糸	打綿	367,733
	綿織糸	467,425
	綿縫糸	975,780
生糸	生糸	3,483,730
毛糸	毛糸	2,833,213
獣皮毛	機械用革帯	961,000
	鞣革	924,273
獣脂	獣脂	72,624
農業投入用		
植物及び動物	ゆり根（千箇当り）	23,941
	豚	43,475
粕類	だいず粕	35,309

も採用したことを付記しておこう。

第5表は戦前の輸移出入の数量系列に採用された品目とそれらの昭和三五年の輸移入単価を示している。

(2) 戦後の輸出入

戦後については資料は『日本外国貿易年表』だけによることにした。昭和三〇年以前と以後とで品目分類に変更があったが、決定的なものではない。数量と金額とは戦後は完全に対応した関係で記載されている。加工品や在庫統計が昭和二六年以降でなければ整備されないので、輸出入統計もこれに合わせることにした。

戦後は記載されている品目が極めて多くなっていて、しかも、継続的なもの、微少なものなどがあるので、これらのすべてを採用することは不可能に思われた。そこで、昭和三〇年代に重点をおき、数量系列が完全で、かつ全体に占めるウエイトが高いということを基準にして、品目を選択した。それらおよびそれらの昭和三五年の輸出入単価を第6表にあげておいた。これをみても分るように、輸出入統計は戦前と戦後とで一貫した数列と単価とをとっているわけではない。あえてこれを行なえば、戦後を戦前に合わせることになり、戦後の詳しい統計の意味がなくなってしまうことを恐れたのである。したがって、戦前と戦後との輸出入統計は一応独立のものということになるが、細かいことにとらわれない限り、昭和三五年基準であるから、両者の比較は有効とみてよいであろう。

推計結果は付録Iに示されているし(2)、大分類の数字のグラフは第1図にみることができる。

なお、消費量推計では油脂および油粕、それに野菜・果実・肉類の各種かん詰はここに示した輸出入量よりはもう少し詳しい数列を利用していることを付記しておこう。また、戦後の統計は名目金額を価格指数でデフレートし

第6表A　輸入単価（戦後用）　（単位：トン当り円）

食用			食用		
分類	品目	単価	分類	品目	単価
原料			加工		
米		51,168	穀粉及び澱粉	小麦粉	32,439
麦類	小麦	23,774		タピオカ澱粉	31,000
	大麦及び裸麦	18,500		マニオカ澱粉	
	麦芽	56,000		サゴ澱粉	25,000
雑穀	とうもろこし	21,551	糖類	てんさい糖	30,185
豆類	だいず	34,280		甜菜糖	
	あずき	40,660		天然蜂蜜	302,000
	そら豆	33,728	調味料	胡椒の種	449,000
	えん豆	36,870		桂皮	262,000
	緑豆	36,552		丁子	269,000
	いんげん	30,625		にくづく	628,000
	らっかせい	78,028	植物油	綿実油	126,000
果実類	レモン	127,000	好嗜飲料	紅茶	479,000
	バナナ	56,000		コーヒー豆	290,000
	くり	119,000		カカオ豆	238,000
	パイナップル	70,000		ココア粉	352,000
煙草	葉たばこ	722,000		インスタントコーヒー	2,044,000
採油用種子	綿実	32,213		カカオ脂	61,000
	なたね	46,705	酒類（kℓ当り）	シャムパン	872,620
	からしの種	56,404		ぶどう酒	358,490
	ごま	71,628		ビール	140,690
	カポック	29,766		ウイスキー類	912,076
	サフラワーの種	44,424			
肉類	羊肉	97,000	煙草	紙巻煙草	1,590,000
	牛肉	200,000			
	豚肉	178,000	加工野菜	乾筍	139,000
	家きん肉	183,000	加工果実	パイナップルかんづめ	133,000
鳥卵	鳥卵（からつき）	189,000		干ぶどう	112,000

（次頁へつづく）

(前頁よりつづき)

食用		
分類	品目	単価
加工食肉	ジャム	144,000
	マーマレード	
	フルーツゼリー	
	ケーシング	1,337,000
乳製品	脱脂粉乳	121,000
	バター	325,000
	チーズ及びカード	292,000
	全脂粉乳	638,000

工業用		
原料		
採油用種子	コプラ	72,265
	あまの種	56,569
	ひまの種	55,909
薬用農産物	ホップ	472,000
麻類	黄麻	82,000
	亜麻	175,000
	ラミー	167,000
	サイザル麻	87,000
	マニラ麻	177,000
棉	繰綿	216,000
	コットンリッター	457,000
羊毛	原羊毛	2,011,000
	羊毛	788,000
その他のせんい類	やしせんい	79,000
加工		

工業用		
分類	品目	単価
植物油	オリーブ油	230,000
	やし油	78,000
	バーム油	
	桐油	149,000
薬用農産物	乳糖	84,000
	ミルクカゼイン	162,000
	糖蜜	8,650
雑品	麦かん真田	285,000
獣毛皮	牛皮	125,005
	子牛皮	377,807
	馬皮	140,542
	わに皮	14,217,000
	とかげ皮	1,730,000
	馬毛及び牛毛	1,221,000
	豚毛	1,686,000
	アンゴラうさぎの毛	1,100,000
	カシミヤやぎの毛	2,149,000
獣脂	牛脂	58,000
	ラード	94,000

農業投入用		
動物及び植物単体飼料	牧草の種	137,000
	こうりゃん	18,937
	マイロ及びその他	
	もろこし類	
	ふすま	21,860
	配合飼料	11,671
	大豆油粕	41,882

第6表B　輸　出　単　価（戦後用）（単位：トン当り円）

食用			食用		
分類	品目	単価	分類	品目	単価
原料				トマトケチャップかん詰	115,000
豆類	あずき	113,731		たくあん漬かん詰	44,000
	えんどう	91,322	加工果実（かん詰）	みかん	137,000
	いんげん	51,812		もも	114,000
いも類	ばれいしょ	20,406		なし	106,000
野菜類	たまねぎ	18,000		オレンジジュース	98,000
	すいか	24,000		ジャム	114,000
	とうがらし	171,000		ママレード	
	しょうが	182,000		フルーツゼリー	
果実類	みかん	86,000	調味料	しょう油（たる詰）	40,000
	りんご	46,000		〃（びん詰）	101,000
	なし	61,000		〃（その他）	95,000
煙草	葉たばこ	311,000		みそ	55,000
鳥卵	鳥卵（からつき）	189,000		マーガリン	109,000
加工				食酢	75,000
穀粉及び澱粉	小麦粉	27,925		ショートニング	144,000
	米粉	144,587	糖類	てんさい糖	37,161
	ばれいしょ澱粉	52,000		蔗糖	37,035
	グルタミンサンソーダ	667,000		車糖	58,000
	ヌードル	68,000		あめ	102,000
	ビスケット（無糖）	199,000		天然蜂蜜	93,000
	マカロニ	74,000	植物油	大豆油	213,000
加工野菜	乾しいたけ	1,442,000		ごま油	169,000
	アスパラガスかん詰	164,000		なたね及びからし油	
	たけのこかん詰	254,000	嗜好飲料	緑茶	208,000
	きのこかん詰	452,000		紅茶	158,000
				チョコレート菓子	269,000

（次頁へつづく）

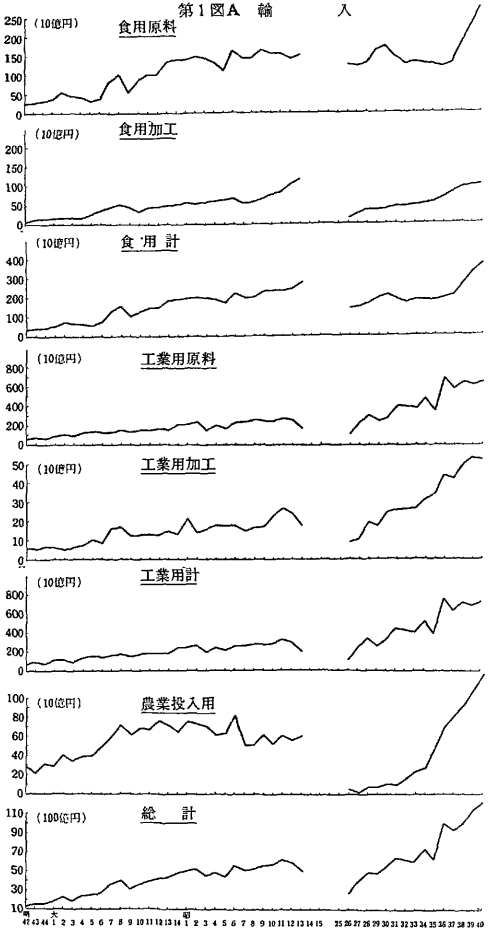
（前頁よりつづき）

食用		
分類	品目	単価
	カカオ脂	433,000
酒類	清酒	224,000
	ビール	80,000
煙草	紙巻たばこ	945,000
加工食肉	肉エキス及びミートジュース	745,000
乳製品	調整粉乳	439,000
工業用		
原料		
薬用農産物	薬用人参	4,849,000
	黄連	1,246,000
	除虫菊	317,000
	紅参	4,431,000
	白参	3,822,000
まゆ	副蚕糸	228,570
加工		
植物油	あまに油	127,000
	ひまし油	156,000
薬用農産物	蚊取線香	238,000
雑品	へちま	908,000
	晃表及び花莚	112,000
	わらむしろ	57,000
	麦かん真田	1,018,000

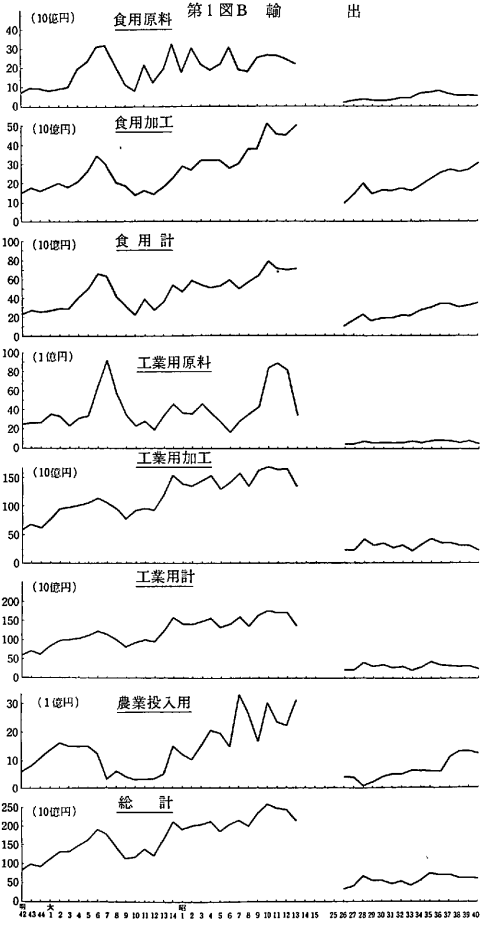
工業用		
分類	品目	単価
麻糸	麻糸	196,180
綿糸	綿糸	481,910
生糸	機械製の生糸曲糸	3,295,000
	〃 14中	3,580,000
	〃 21中	3,413,000
	〃 その他	3,518,000
	絹紡糸	3,082,900
毛糸	毛糸	1,408,720
獣毛皮	馬毛及び牛毛	149,000
	豚毛	2,042,000
	ミンク及びいたちの毛皮	15,737,000
	リスの毛皮	7,212,000
	アンゴラうさぎの毛	3,434,000
	うさぎ毛皮	1,114,000
	カシミヤやぎの毛	4,738,000
獣脂	ラード	104,000
農業投入用		
植物及び動物	ゆり根	220,000
	チューリップ根	227,000
	蚕種	57,041
粕類	大豆油粕	35,309
糟糠類	配合飼料	33,914

てふくらませるというような操作をしていないことも注意しておこう。このような手続きにより脱落品目を復活させることは後日の課題としておきたい。

第1図A　輸　　入



第1図B　輸　　出


(10億円)
食用原料
(10億円)
食用加工
(10億円)
食 用 計
(1億円)
工業用原料
工業用加工
(10億円)
工業用計
(10億円)
(1億円)
農業投入用
総　計
(10億円)
昭 42 43 44 大 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 昭 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

注(1)　農林省農務局『穀物要覧』、『小麦要覧』、『豆類要覧』、『園芸農産物要覧』、『工芸農産物要覧』、『茶業要覧』、『麦その他の穀物要覧』、『米穀統計』、『糖菜要覧』。農林省蚕糸局『蚕糸要覧』、農林省畜産局『本邦畜産要覧』。農林省農政局『肥料要覧』。以上は主要なもので、このほかにも幾つか存在している。

(2)　紙数の関係で、推計値のすべてを掲載することはできなかった。

四　農産物の消費額

(1)　推計上の諸問題

以上で農産物の生産額と輸出入額が求められたのであるから、これらの結合から消費額を求めればよいのだが、実際にはこの作業はそれほど単純ではない。まず第一に、在庫の問題がある。資料としては戦前からとれるのは米だけであった。[1] 戦後については在庫資料はかなり存在するのであるが、必ずしも満足な状態にあるとはいえない。実際に採用したのは米麦[2]と油脂および油粕である。その他については在庫の考慮はしていない。また、大部分の食料品はその必要が余りないし、非食料は余り大きなウェイトを示さないので、この処置に必ずしも不当ということにはならない。また、砂糖・煙草については売渡量が採用されているから、実質的には在庫を考慮したのと同じことになる。なお、在庫に関する統計は以上のようなわけで、数が少ないし、問題もあるので、金額集計は行なっていない。

第二に期間の問題がある。つまり、基準を暦年にすべきか、会計年度にすべきか、作物年度にすべきかという問題がある。生産および輸出入統計が暦年ベースであったところから、消費額もそれにならいたいところである。ところが、加工品の資料が必ずしもそのように仕組まれているとは限らない。また、在庫の資料があれば、消費統計

も暦年に統一することは意味があろうが、それがないとなると、暦年の消費が原料の点で暦年の生産および輸出入に対応しているという保証はどこにも存在しない。そんなわけで、一応、暦年ベースが採用されたが、問題があるわけだし、戦後の小麦粉・澱粉・乾かんしょや砂糖・糖蜜・煙草などはいずれも会計年度が使用されたし、酒類は酒造年度が利用された。また、米は在庫の関係で米穀年度が採用された。これらの点は資料と時間の不足のために、このような形となったが、将来は『食糧需給表』などを参考に期間の統一を計るべきである。

第三に、加工品の資料が完全でない点である。これは戦前において特に著しい現象であるが、戦後についても、決して事態が緩和しているわけではない。そのために、既述のような、輸出入だけに登場する商品も出現してくるわけである。完全に資料の存在しないものはどうすることもできないし、また、かかるものは全体に占める重要度の点では余り大きくないからよいとして、資料が一部分しかないものについては、かえって仕末が悪い。結局、補間推計ということになるのであるが、このために精度がそこなわれることは当然である。

第四に、加工品の資料はあっても、その原料に関する資料が存在しないという場合も非常に多い。かかる場合には、原料換算率を求めこれによって推定する以外に方法がないわけである。また、反対に原料に関する資料が余りにも詳細で、そのすべてを採用しえない場合もある。いずれの場合も、直消の推計に影響し、この値をゆがめてしまうことになるだろう。

第五に評価の問題がある。直消・加工をそれらの生産および輸出入統計から数量で求めたから、これらを消費額として再評価する必要がある。ここでもパーシェ方式の価格指数を採用することにしてあるから、昭和三五年の価格体系が必要である。この段階では農場価格や輸出入価格ではなく、卸売価格ないし小売価格による評価が妥当で

第7表 卸売価格 (単位：トン当り円)

分類	品目	単価	備考
	食用		
	原料		
米	米	76,400	日銀卸売価格
麦類	小麦	36,830	〃
	大麦	49,594	〃
	裸麦	48,562	〃
	えんぱく麦	35,075	〃
	らい麦		〃
雑穀	とうもろこし	24,336	〃
	あわ	28,000	〃
	ひえ		
	きびし		
	もろこし	26,270	農場価格
豆類	だいず	54,200	日銀卸売価格
	えんどう	36,870	輸入価格
	そらまめ	42,600	農場価格
	いんげん	57,015	日銀卸売価格
	あずき	93,937	〃
	さげ	59,382	〃
	あさりょくとう	36,552	輸入価格
	らっかせい	79,731	日銀卸売価格
いも類	かんしょ	18,580	〃
	ばれいしょ	18,990	〃
野菜	とうもろこし(未)	21,480	〃
	だいず(未)	28,790	〃
	えんどう(未)	97,780	〃
	そらまめ(未)	33,980	〃
	いんげん(未)	53,680	〃
	きゅうり	38,620	〃
	しろうり	20,450	〃
	かぼちゃ	21,650	〃
	すいか	15,660	〃
	なす	26,560	〃
	とまと	36,650	〃
	きゃべつ	15,470	〃
	結球はくさい	8,330	〃
	非結球つけ菜	6,550	〃
	ほうれんそう	21,820	〃
	ねぎ	18,820	〃
	たまねぎ	15,710	〃
果実	たけのこ	46,390	〃
	ただいこん	9,040	〃
	かぶら	14,630	〃
	にんじん	28,920	〃
	ごぼう	28,990	〃
	さといも	29,670	〃
	れんこん	53,650	〃
	みかん	58,660	〃
	ネーブルオレンジ	109,020	〃 輸入価格
	パイナップル	69,905	日銀卸売価格
	なつみかん	36,580	〃
	雑かん	85,850	〃
	りんご	44,310	〃
	ぶどう	68,920	〃
	日本なし	37,140	〃
	西洋なし		〃
	もも	66,190	〃
	おうとう	276,210	〃
	びわ	112,150	〃
	うめ	117,590	〃
	かきり	42,714	〃
	バナモ	126,270	〃
	レナン	171,500	〃
	モン	127,000	〃
肉類	乳用牛	267,922	肉牛価格より推定
	と肉用牛	224,000	芝浦価格
	肉用牛	287,470	〃
	豚	345,540	〃
	馬	180,000	〃
	めん羊	147,500	〃
	やぎ		
	うさぎ	1羽当り385	農場価格
	廃鶏	243,000	日銀卸売価格
	ブロイラー		
生乳	牛乳	48,800	〃
	やぎ乳	31,160	農場価格
鶏卵	鶏卵	195,650	日銀卸売価格
	加工		
穀粉及び澱粉	小麦粉	45,120	日銀卸売価格
	かんしょ澱粉	39,170	〃
	ばれいしょ澱粉	48,812	〃
	乾かんしょ	26,400	農林省調
	そば粉	79,800	日銀卸売価格
	こんにゃく粉	890,625	農林省調

分類	品目	単価	備考
糖類及び調整品	砂糖	98,937	日銀卸売価格
	天然蜂蜜	302,000	輸入価格
植物油	だいず油	167,103	日銀卸売価格
	らっかせい油	167,103	だいず油価格で代用
	ごま油	601,356	業界調
	なたね油 からし油	162,673	日銀卸売価格
	棉実油	136,711	業界調
	サフラー油	142,468	〃
	米糠油	128,931	〃
	かぼっく油	137,052	〃
酒類 (kl当り)	清酒	251,528	日銀卸売価格
	ビール	161,490	〃
	果実酒	318,180	〃
	ウイスキー	820,000	輸入価格
	シャムパン類	873,000	〃
	その他酒類	378,000	〃
嗜好飲料	茶	400,000	日銀卸売価格
	コーヒー豆	1,016,200	〃
	カカオ豆	238,000	輸入価格
	ココア粉	352,000	〃
	インスタントコーヒー	2,044,000	〃
	カカオ脂	61,000	〃
煙草	口付 (千本当り)	1,380	『専売統計表』より
	両切 (千本当り)	2,274	〃
	葉巻 (千本当り)	29,733	〃
	きざみ	1,603,000	〃
	その他 (千本当り)	2,125	〃
乳製品	全煉	(大)176,816 (小)200,041	農林省調
	無糖	160,026	〃
	全粉	385,680	〃
	調粉	506,666	〃
	加粉	430,740	〃
	バター	564,444	〃
	チーズ	573,333	〃
	脱煉	147,960	〃
	脱粉	310,640	〃
加工肉	ハム	754,410	日銀卸売価格
	ソーセージ	475,970	〃

分類	品目	単価	備考
加工野菜(缶詰)	アニオカ澱粉 タピオカ澱粉	31,000	輸入価格
	サゴ澱粉	25,000	〃
	とうふ	43,600	農林省調
	たけのこ	254,473	輸出価格
	アスパラガス	164,087	〃
	トマト	95,754	農林省調
	スイートコーン その他豆類 野菜加工澱物	224,511	輸出価格
	216,207	〃	
	トマトジュース その他野菜ジュース	93,570	〃
	グリンピース その他豆類	192,241	〃
	干たけのこ	139,000	輸入価格
加工果実(缶詰)	みかん	136,390	輸出価格
	もも	114,195	〃
	なしもしご	106,176	〃
	りんご	380,117	農林省調
	びわ	117,634	〃
	さくらんぼ	231,259	輸出価格
	その他の果実 混合果実	113,329	〃
	リンゴジャム オレンジジャム ママレード あんずジャム いちごジャム	113,952	〃
	オレンジジュース	97,936	〃
	アップルジュース その他の果実ジュース	96,763	〃
	パイアップル	244,268	日銀卸売価格
調味料	しょう油	76,505	〃
	みそ	56,685	〃
	胡椒の種	499,000	輸入価格
	桂皮	262,000	〃
	丁子	269,000	〃
	にくづく	628,000	〃

分類	品目	単価	備考
	真綿	3,309,000	農林省調
	紡績絹繊維	3,211,300	日銀卸売価格
綿糸	綿糸	407,362	〃
麻糸	あま糸	785,000	〃
	こうま糸	213,330	〃
毛糸	そ毛糸	785,000	〃
	紡毛糸	213,330	〃
獣皮毛	牛皮	3,124	皮革価格より推定
	馬皮	2,449	〃
	豚皮	203	〃
	めん羊皮	184	〃
	やぎ皮		〃
	その他	—	輸出入価格
獣脂	牛脂	—	〃
	豚脂	—	〃
	オレイン	—	〃
	ステアリン	—	〃
	その他	—	〃
	ラード	—	〃

農業投入用

分類	品目	単価	備考
糟糠類	米糠	18,667	日銀卸売価格
	麦糠	21,557	〃
	ふすま	22,440	〃
粕類	だいず油粕	40,056	〃
	らっかせい油粕	40,056	だいず油粕価格で代用
	ごま油粕	29,440	薬界調
	なたね油粕	26,864	日銀卸売価格
	からし油粕		
	コプラ油粕	24,293	薬界調
	棉実油粕	27,573	〃
	あまに油粕	30,187	〃
	ひまし油粕	21,413	〃
	カポック油粕	21,413	〃
	パーム核油粕	21,413	〃
	サフラー油粕	13,466	〃
その他粕類	澱粉類	13,813	飼料業界調
	しょう油粕	9,100	〃
	とうふ粕	7,080	〃
	ビール粕	6,380	〃
	ビートパルプ	43,833	〃
単体飼料	こうりゃん	18,937	輸入価格

分類	品目	単価	備考
	ベーコン	621,000	日銀卸売価格
	牛肉缶詰	282,074	輸出価格
	コンビーフ		
	鳥獣肉缶詰	308,474	〃
	その他の畜肉缶詰	126,029	〃
	畜肉加工缶詰	477,612	〃
	畜肉野菜混合煮缶詰	285,286	〃
	ケーシング	1,337,000	輸入価格

工業用

分類	品目	単価	備考
植物油	あまに油	133,653	業界調
	ひまし油	146,237	〃
	オリーブ油	146,237	ひまし油価格で代用
	桐油	133,653	あまに油価格で代用
	コプラ油	118,501	業界調
	パーム核油	117,538	〃
	えごま油	133,653	あまに油価格で代用
	木ろう	164,653	輸出価格
農薬用農産物	はっか油	3,920,000	農林省調
	はっか脳	7,950,001	〃
	ホップ	471,530	輸入価格
	薬用人参	4,419,114	輸出価格
	ミルクカゼイン	162,000	輸入価格
	除虫菊	386,676	農林省調のエキス価格より推定
	あい	66,000	農産価格
	糖蜜	8,650,000	輸入価格
	乳糖	84,000	〃
雑品	たたみ表	169,777	輸出価格
	花ござ	102,222	〃
	麦かん真田	121,212	〃
	へちま	910,725	〃
	こうりやなぎ	70,000	農産価格
	うぞ	78,000	〃
	みつまた	82,000	〃
	稻わら	3,920	〃
生糸	生糸	3,512,370	日銀卸売価格
	玉糸	3,278,500	〃

ある。『産業連関表』との関係で、この昭和三五年価格の借用を期待したのであるが、その整理が本推計期間中に間に合わなかったので、価格体系は独自に作成することにした。それが第7表に示されている。日銀『卸売物価指数年報』を採用することを前提とし、それがない場合は農林省ないし業会調べの価格をとり、それにもないときは輸出または輸入価格を採用した。また、数例ではあるが農場価格をそのまま使用した場合もある。このうち、こうりやなぎ・こうぞ・みつまたは加工段階の実態がつかめなかったので、やむをえず農場段階の値をそのままにしておいたのである。そらまめについては実際に卸売価格がえられなかったのである。いずれにしろ、このような複合的な価格体系は望ましいものでないことは事実であり、周囲の状態が改善されたら、改訂する意向であるが、とりあえずはこのような形で推計がなされている。

(2) 戦前の消費額

既述のように、この段階の推計はまず加工品の統計整備が先行する。ところが、戦前に関するこの部分の統計は極めて貧弱である。典拠は『農商務省統計表』、『農林省統計表』、『商工省統計表』である。このうち、『商工省統計表』は昭和一三年をもって終っており、これに連らなる『工業統計表は』必ずしも連続性を保っていないし、といって、その前身の『工場統計表』は農産物加工業にとっては上層偏倚を示しているから[3]、それによるわけにもいかず、結局、戦前は昭和一三年をもって推計を打ち切ることにした。輸出入統計の面からも、このことは余儀なくされたことは前述した。なお、統計は以上のほかに、各種の「要覧」があり、この分野では特に『工芸農産物要覧』が非常に大きな利用価値を示している。大体はこれらの資料によっているのであるが、細部に多少の違いや推

計が入ったので、主要な品目について説明を加えておこう。

穀粉および澱粉ではまず小麦粉が問題である。公表統計は大正一〇年までは『農商務省統計表』にあり、それ以後は『工場統計表』および『工業統計表』にひきつがれたため、そこに断層が発生している。しかも、いずれの場合も機械製粉であったから、戦前に重要な地位を占めていた水車製粉が脱落することになる。この点の補間推計は既に水野武夫氏[4]によりなされているので、これを借用することにした。方法は小麦の用途別使用量の調査に基づいている。農林省では大正一一年、昭和元年、昭和六年にこの種の調査を行なっている。[5]それ以外の年については水野氏が業会などに問い合わせて調査したものらしい。いずれにしろ、現在にいたっても、これ以上の統計を新たに作成することは望めそうにもないので、この推計をそのまま借用することにした。玄麦換算については農林省のその当時の比率に従った。また、その裏側としては糟糠類中のふすまの推計が可能となったわけである。

そば粉はそばに七〇%を、こんにゃく粉はこんにゃくいもに一二%（精粉）をそれぞれ掛けて算出した。

澱粉に関する資料は存在するが、いも澱粉の種類別資料は大正一一年以降でなければみられない。逆に、原料需要高は大正一五年まで存在する。したがって、製品と原料の資料が両方とも存在する大正一一～一五年に関しては両者の比率がえられるので、これの平均値を利用して、製品と原料とのそれぞれ欠如部分の推計を行なった。澱粉粕の資料は存在しないので、農林省畜産局『飼料に関する資料』および『畜産提要』の比率を借用することによって推計している。

とうふに関する資料も戦前は存在しない。ただ、右にあげた畜産局資料にとうふの原料だいずの量があがっているのと、『穀物要覧』にだいずの用途別使用割合が大正一一年および昭和元年について示されているので、これら

を利用して、まずとうふの原料だいずの系列を作り、これに畜産局資料の比率を乗じてとうふ粕を求めた。とうふそのものについては原料だいずの四倍の重量になるといわれているので、これを使用した。

乾かんしょの資料も『工芸農産物要覧』に昭和元年以降みられるが、それ以前については、かんしょ生産量との比率を昭和元～五年についてとり、それを適用している。原料換算率は三三％とした。

加工野菜・加工果実・加工畜肉としてはまずかん詰が考えられる。ところが、かん詰の資料には野菜・果実・牛肉・その他の鳥獣肉以上の内訳がない。[6] その上、重量表示の年と箇数表示の年とがある。そこで、まず箇数表示を重量換算する必要がある。この点に関するはっきりした資料は存在しないが、一般的には当時かん詰は一ポンドかんのものが一〇種類ほどあったといわれている。そこで一箇一ポンドとして重量換算を行なってみた。次に、これらの評価であるが、昭和三五年における野菜・果実・牛肉・豚肉・その他の鳥獣肉かん詰の平均単価を使用した。当時の内容構成と昭和三五年のそれとではかなり違っているはずだが、やむをえないことであった。最後に原料換算の問題が残る。戦後については固形重量を求め、それの原単位により原料換算したが、戦前については、このような手の込んだ操作をするほどの精度は原資料そのものに既に欠けているので、かん詰の重量をそのまま原料重量とみなした。ただ、肉類に関してはそれを正肉と考え、枝肉に換算した。

野菜と果実のかん詰については、内訳がないから、原料に換算してみても、それを各品目にどのように配分すべきかという問題にぶつかってしまう。このことに関する決め手はまず存在しないので、ここでは当時かん詰に多く使用されたと思われる品目をあげ、それらの戦前の農場生産の平均的なウエイトを用いて、かん詰原料を各品目に配分した。野菜ではたけのこ・にんじん・ごぼう・れんこんであり、果実ではみかん・なし・もも・おうとうであ

る。[7] パイナップルのかん詰は輸入品のみとした。

ハム・ソーセージ・ベーコンもそのまま正肉とみて、枝肉量へ原料換算した。

乳製品については、煉乳と粉乳が全脂であるか脱脂であるか明らかでない。しかし、戦前は全脂が主体であっただろうという観点で、すべてを全脂として扱った。ただ、バターの生産があるから脱脂乳がないことはないのだが、この点の配慮はなされていない。煉乳・粉乳・バター・チーズの生乳換算率は農林省畜産局乳製品課のものによった。

ところで、肉製品・乳製品の資料は農林省畜産局『本邦畜産要覧』および『畜産提要』によったが、これも大正六年以降しかとれない。これ以前の資料を把握するためには農林省畜産局『本邦ニオケル乳製品及肉製品』および『畜産統計』などか適当であろう。

調味料としてはみそ・しょう油が考えられているが、これに関する資料は昭和五年以降について、『みそ工業調査月報』と『しょう油およびアミノ酸工業調査月報』から集録された数字が農林省食糧庁『食糧管理年報』にみられる。昭和五年以前については資料は皆無に等しい。みそについては、その原料である米の用途別使費量が大正一〇年、昭和五年、昭和九～一五年について存在する。[8] そこで、みそと原料米との関係を利用して、大正一〇年のみそ の量を推定し、これと、昭和五年との間を線型補間し、その傾向を大正一〇年以前へ延長させた。その結果を人口で割り、みその一人当り消費量をみるに余り大きな変化がみられないので、これに従うことにした。しょう油については、大正六年まで大蔵省『主税局年報書』の消費課税の対象としてしょう油があがっているので、これを使用し、大正七年から昭和五年までは線型補間を行なった。消費課税の資料は自家用が含まれていないものと思われ

る。なお、しょう油の生産量に一定比率を掛けてしょう油粕を推計したが、この比率は畜産局の飼料関係の資料から借用した。

なおみそ・しょう油の原料換算には二つの問題がある。一つは原料が数種あるので、それをどの程度、採用するかということである。もちろん主要なものをとることとし、戦前については、みそは米とだいず、しょう油は小麦とだいずということにした。このほかに戦後は大・裸麦を含めたが、戦前は採用しなかった。しょう油についてはこのほかに脱脂だいず(だいず粕)もあるが、これを使用する方法は昭和一六年以降に顕著となったということなので、戦前では問題にしなかった。ところで、これらの原料の推定であるが、みそ用の米については既述のようにある程度資料があるのでこれらを利用し、ないところは線型補間した。またみそ用だいずは米が一に対して二という比率を用いた。[9] 実際には米とだいずの比率が逆になるものもあるが、ここではそれは少量とみて無視した。だいずの用途別使用量の昭和二年に関する調査もこれを支持しているようである。しょう油の原料換算は前述のように小麦およびだいずの用途別使用量の調査を利用する以外にはない。技術的にはしょう油三、四〇〇に対し小麦が八五〇、大豆が一〇〇、という比率であるといわれる。[10] これらの比率と既存の調査とを組み合わせて推計が行なわれた。

糖類に関しては、『主税局統計年報書』および農林省農務局『糖業要覧』によった。植物油および油脂に関しては『工芸農産物要覧』によった。

酒類に関しては『主税局統計年報書』によった。このうち清酒の原料米は同資料からとった。農林省にも酒造米統計はあるが、やや過大である。精米から玄米への換算率は農林省のそれにならって八七%とした。ビールの原料である大麦は通常、ビール一リットルに対し二五グラムが標準であるが、これを用いた計算と、全販連『麦類に関

する統計資料』のなかにあるビール用大麦の量とはほぼ一致するので、後者を採用することにした。ぶどう酒は生ぶどう酒一リットルに対し一・四二八キロリットルのぶどうを必要とするので、この比率を使用した。[11]

嗜好飲料としての茶は生産統計が生葉なので、これを仕上げ茶とするために、二三%の比率を用いた。煙草の製品資料は専売公社『専売統計年報』が利用された。

薬用農産物のうち、はっか油およびはっか脳・糖蜜は『工芸農産物要覧』よりとられた。雑品のうち、畳表・花莚・ござ・ばっかん真田も同じ資料から求められた。このうち、畳表・花莚・ござは枚数で示されているし、ばっかん真田も束で示されている場合がある。これらは業界より重量換算率を借用した。あい・薬用にんじん・こうりやなぎ・こうぞ・みつまた・へちまなどは加工過程が余り明らかでないので、そのままにしておいた。

せんい類に関しては通産省『繊維統計年報』によって昭和元年以降の糸類の生産量が把握できる。また大正一〇年までは『農商務省統計表』によって綿糸および麻糸の生産量はえられる。したがって、綿糸と麻糸は大正一一～一四年が推計されなければならないが、この部分は『工場統計表』を補正して使用した。毛糸の統計は昭和元年以前はとらえられないので、『工場統計表』と羊毛の供給量とから推計した。生糸・真綿に関しては、農林省蚕糸局『蚕糸要覧』が利用された。絹紡糸・紬糸は綿糸・麻糸・毛糸と同じような資料と方法が利用された。

獣皮毛は馬革・牛革の資料は存在するが、国産は牛・馬・豚・めん羊・やぎの原皮および兎毛だけと考え、その他は無視した。輸移出入の差額を国産のそれらの値に加えることで消費量を推定した。国産原皮量は屠殺頭数によった。評価額については後述する。

農業投入財に関しては糟糠類と粕類は既に説明したので、あとは生産指数のところで推計した中間生産物および

在庫調整部分と輸出入に現われた原料形態の飼料および動植物ということになる。原料形態の飼料としては小麦・とうもろこし・だいずである。

(3) 戦後の消費額

戦後になると、資料が整備されてくるので、推計する部分は少なくなる。穀粉および澱粉では小麦粉およびいも澱粉は、食糧庁『食糧管理年報』からえられる。それらの原料も同様である。ふすまおよび澱粉粕については農林省畜産局『濃厚飼料統計年報』とその方法が参考となる。乾かんしょは食糧庁の砂糖類課調べがある。とうふは食糧庁油脂課『油糧統計年報』に原料だいずの統計があるので、それから求めた。とうふ粕は『濃厚飼料統計年報』の方法が適用された。米ぬか・麦ぬか・しょう油粕・ビール粕についても同様である。そば粉とこんにゃく粉とは戦前と同じ推計である。

野菜・果実・畜産のかん詰は日本缶詰協会『青果物加工品生産流通事情調査報告書』および『缶詰時報』を利用した。原料換算率についても同協会の調査が利用された。

かん詰以外の肉製品についても、日本食肉加工協会（昭和三七年まで）と農林省統計調査部（昭和三八年以降）との調査が利用される。ただ、ここで問題となるのは原料の方である。原料の調査は昭和三三～三五年と昭和三八年以降としかない。したがって、これらの資料と製品資料とから欠如している原料の資料を推計した。

乳製品については農林省統計調査部『牛乳・飲用牛乳・乳製品の生産消費量に関する統計』によった。

調味料については、みそ、しょう油とも『食糧管理年報』でえられるし、それらの原料についても同様である。

ただ昭和三〇年以前の原料資料は『油糧統計年報』によった。

糖類および酒類はいずれも国税庁『国税庁統計年報書』によった。ただし、酒造米は食糧庁の調査を用い、ビール用大麦は日本ビール協会（昭和三三年まで）と食糧庁（昭和三四年以降）との調査によった。煙草は『専売統計年報』を利用した。嗜好飲料は戦前と同じ扱いである。

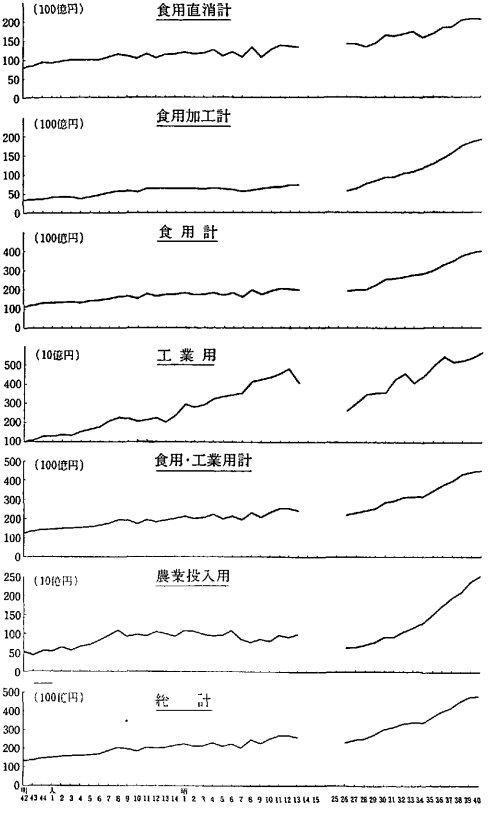
植物油および油粕は『油糧統計年報』によった。生糸は『蚕糸業要覧』に、絹紡糸・綿糸・麻糸・毛糸は『繊維統計年報』によった。畝毛皮については戦前と同じ方式である。評価は牛皮・豚皮の昭和四〇年之蒲価格を通産省『皮革統計年報』の牛革・豚革価格で昭和三五年価格へ修正した。また、同じ統計の馬革・やぎ・めん羊革価格に牛革・牛皮および豚革・豚皮比率を適用して、馬皮・やぎ・めん羊皮価格を推計した。

戦後、資料の点で非常に苦労するのは薬用農産物と雑品類である。あい・薬用にんじん・へちま・こうりやなぎ・こうぞ・みつまたは加工形態への変換を考えない。しかし、はっか油およびはっか脳はその取卸油を園芸局特産課の調査によって求め、それを六〇対三五の比率で分割して推定した。ばっかん真旧も特産課の推定である。畳表・花莚およびござはいおよびしちとういのこれら製品に対する比率を戦前の資料で求め、これを戦後のいおよびしちとういに掛けて、製品の推定をした。以上のような諸推計は好ましいものではないが、農産物全体からみると微少なので、ある程度黙認した。

これまで述べてきた手続きによって、消費額がえられたが、その結果は付録資料Ⅱに集録されている。[12] また、合計値のグラフが第2図に示されている。

注(1)　大正三年から在庫はある。

第2図 農 産 物 消 費 額


(100億円)
食用直消計
(100億円)
食用加工計
(100億円)
食 用 計
(10億円)
工 業 用
(100億円)
食用・工業用計
(10億円)
農業投入用
(100億円)
総 計
昭 42 43 44 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
昭 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

(2) 政府と生産者所得を考えている戦前の麦類は二カ年の移動平均がとられ、在庫の欠如を補った。
(3) 五人以上の従業員を有する工場の調査である。
(4) 水野武夫『日本小麦の経済的研究』(昭和一九年)。
(5) 『小麦要覧』を見よ。
(6) 日本かん詰協会の資料で昭和五年以降についてやや詳しいものが発見されたが、今回は使用しなかった。
(7) 実際には種類はもっとあったが、アスパラガスやマッシュルームのように、生産指数に採用されていない品目なので、ここに述べたような結果になってしまった。
(8) 『米穀統計』を見よ。
(9)(10) 食糧研究所の示唆による。
(11) ビールおよびぶどう酒は醸造研究所の示唆による。
(12) 紙数の関係で、詳しい統計は発表できなかった。また、加工品のうち国産部分の統計や原料を直消用および加工用へ分割した統計も発表できなかったのは遺憾である。

五　むすび

(1) 要　約

ある程度の連続性を保てる資料は、農産物に関しては明治四二年から整備されていると考えられたので、この時点から昭和四〇年までの長期の需給資料を、途中昭和一六〜二四年の戦中・戦後の混乱期を除いて、作成してみた。農業の生産指数のデータから出発して、それを需要に見合うように食用・工業用・農業投入用の区分に従って、品目の組み替えを行ない、それに輸出入を考慮して、最終需要の段階までの推計を行なったが、その過程で直接消費と加工との仕訳を必要とした。

結果は別の機会に詳しい分析を行ないたいと考えているが、大雑把にみる限り、農産物消費は総計では、やはり戦後の方が高い成長率を示している。これは人口増加と一人当り所得の成長とで説明がつくことのように思われる。食用と工業用とでは、昭和三五年に戦前水準をこえた工業用は食用の七分の一程度であるが、成長率は戦前・戦後で近似している。食用は戦後の成長率の方が高い。この原因はもちろん、加工分野の戦後の増大に負うところが多く、加工は戦前は直消の二分の一程度だったのに、昭和四〇年にはほぼ等しくなっている事実でも、その伸びの目覚ましさがうかがわれる。

農業投入費は工業用の二分の一程度のウェイトであるが、戦後の増加が著しい。いうまでもなく、それは飼料用が主体である。元来、農業生産は同じく農業生産物によって再生産される部分を持つ自己回帰的産業であるが、かつては有機質肥料から無機質肥料への技術変化によって、その程度を落したのに、戦後は飼料によって、その部分が増加する可能性をもったことになる。

しかも、その自己回帰は自国内で完結せず、輸入に依存することになる。工業用農産物の自国内生産は停滞ないし減少しているから、この部分の輸入が増大するのは当然として、右のような理由から、農業投入用の輸入増加が戦後みられるようになったことは、昭和三五年以後の食用原料の輸入急増とともに注目すべき現象である。食費加工品の輸入品が戦前なみに押えられているのがせめてものなぐさめである。

農産物貿易に関しては入超が戦前からの型であり、戦後はそれが戦前以下に抑えられている状態である。ただ、方向としては食用加工品と農業投入財との輸出が戦前と同様に上昇傾向を示しているので、若干の希望を与えてくれる。しかし、大勢としては大幅の入超が戦前同様、今後ますます明確になることだけは事実である。

(2) 問題点

資料の作成に無理の伴わないものはないが、今回の作業でもそれは同じであった。したがって、その部分の主なものを列挙して将来の改良のための課題にしておこう。

1 輸出入および消費を通して、品目の仕訳をその本性に即さず、便宜的にしている部分がある。
2 輸出入に関しては、戦前と戦後とで品目が一致せず、また同一品目でも価格の一致しないものがある。
3 戦前については輸出入と移出入との区別がない。
4 加工品の品目が不足している。
5 加工品の原料換算率に問題がある。
6 加工品の年度が不揃いである。
7 在庫品の資料が不足している。
8 昭和三五年という評価基準時点に問題があるかもしれない。
9 評価のための単価が、必ずしも一定の資料から出ていない。
10 仕訳分類の範ちゅうが理論的に定義されていない。

（研究員）

付録Ⅰ　A　輪　　入　　(単位：百万円)

	食用原料	食用加工	食用計	工業用原料	工業用加工	工業用計	農業投入用	総計
明治42	29,228	7,393	36,621	61,795	6,297	68,093	28,556	133,271
43	27,672	13,097	40,770	79,194	5,821	85,015	21,769	147,555
44	31,192	15,765	47,557	65,819	6,938	72,758	30,342	150,659
大正 1	37,190	17,239	54,430	95,901	6,724	102,625	28,510	185,566
2	57,835	20,868	78,704	100,944	5,369	106,364	40,069	225,138
3	45,112	20,027	65,139	92,541	6,313	98,544	34,122	198,117
4	44,351	20,642	64,993	123,169	7,358	130,527	38,143	233,664
5	33,148	27,143	60,291	134,142	10,082	144,224	39,636	244,352
6	39,748	39,623	79,371	126,607	8,503	135,110	48,472	262,954
7	84,607	48,678	133,286	135,063	16,270	151,334	59,534	344,155
8	102,865	56,113	158,978	145,907	16,811	162,718	72,310	934,007
9	55,521	48,373	103,894	136,864	12,036	148,900	62,225	315,020
10	86,703	38,534	125,238	151,577	12,727	164,305	68,078	357,622
11	100,488	45,303	145,791	156,622	12,923	169,546	66,663	382,001
12	104,194	47,892	152,087	164,564	12,567	177,123	76,870	406,090
13	136,552	50,397	186,949	159,729	14,889	174,669	71,067	432,686
14	139,544	56,383	196,338	208,379	13,060	221,440	64,083	481,862
昭和 1	139,918	59,789	198,907	211,370	21,318	232,689	75,950	507,546
2	147,688	55,932	203,620	232,538	13,833	246,371	74,255	524,247
3	142,877	59,474	202,361	165,886	15,263	181,150	70,303	453,815
4	133,628	62,575	196,203	207,716	17,544	225,261	61,761	483,226
5	115,880	65,733	181,614	186,888	17,163	204,051	63,665	449,331
6	161,128	68,267	229,396	231,390	17,070	248,460	82,450	560,307
7	144,395	59,526	203,932	239,101	14,666	253,768	51,962	509,663
8	143,651	59,748	203,400	255,606	15,987	271,594	52,415	527,409
9	167,337	67,462	234,800	248,399	17,660	266,059	63,170	564,030
10	155,274	82,414	237,689	254,522	22,773	277,346	53,569	568,621
11	155,054	87,985	243,039	287,521	27,191	314,712	61,448	619,200
12	141,969	105,037	247,007	269,940	24,428	294,869	57,248	599,125
13	150,271	111,606	261,877	173,521	17,144	190,665	61,348	513,891
26	126,119	15,536	141,656	105,609	9,388	194,997	6,488	263,143
27	122,208	26,798	149,007	234,740	10,441	245,181	2,523	396,713
28	126,876	38,712	165,588	303,636	19,993	323,630	8,416	497,635
29	161,853	37,895	199,749	259,718	17,632	227,351	8,824	485,825
30	171,481	39,550	211,031	299,950	24,891	324,932	11,059	547,023
31	146,774	54,335	192,110	413,924	26,375	440,299	10,685	643,096
32	128,169	47,342	175,512	408,291	26,604	434,895	17,602	628,010
33	132,677	48,780	181,457	381,426	26,971	408,398	24,934	614,790
34	129,554	51,012	180,567	498,132	31,890	530,022	29,317	739,906
35	126,066	56,640	182,706	365,337	34,466	399,804	49,123	631,634
36	121,785	69,179	190,964	712,513	44,037	756,550	71,528	1,019,043
37	132,599	81,758	214,357	591,312	42,780	634,093	84,057	932,508
38	181,734	91,306	273,041	669,329	50,025	719,354	94,398	1,086,794
39	231,763	100,543	332,306	639,471	53,153	692,624	110,655	1,140,986
40	271,851	102,468	374,320	677,406	52,218	729,625	129,198	1,233,143

付録I B 輸出

(単位 百万円)

	食用原料	食用加工	食用計	工業用原料	工業用加工	工業用計	農業投入用	総計
明治42	7,973	15,122	23,096	2,422	57,719	60,141	626	83,864
43	9,401	17,275	27,676	2,722	69,238	71,961	799	99,437
44	9,921	15,578	25,799	2,759	61,552	64,312	1,143	91,255
大正 1	8,696	18,811	27,508	3,573	79,396	82,970	1,386	111,864
2	9,215	20,184	29,400	3,456	95,746	99,202	1,654	130,257
3	10,772	18,461	29,234	2,365	98,051	100,417	1,504	131,155
4	19,939	21,685	41,624	3,137	100,686	103,824	1,494	146,944
5	23,074	26,773	49,847	2,222	107,919	111,242	1,509	162,598
6	31,533	34,550	66,083	6,555	115,770	122,326	1,191	189,601
7	31,812	30,372	62,184	9,371	107,420	116,792	329	179,306
8	20,514	20,748	41,262	5,865	95,140	101,006	625	142,894
9	11,665	18,853	30,519	3,547	77,052	80,600	389	111,509
10	8,799	13,935	22,735	2,344	91,707	94,052	358	117,146
11	21,921	16,255	38,177	2,758	96,094	98,852	365	137,395
12	13,149	14,072	27,221	1,890	93,023	94,913	354	122,490
13	19,487	17,748	37,235	3,500	119,817	123,317	573	161,125
14	32,452	22,190	54,642	4,501	152,989	157,490	1,429	213,562
昭和 1	17,732	29,010	46,742	3,660	138,426	142,087	1,228	190,059
2	31,345	26,888	58,234	3,676	136,388	140,065	1,041	199,341
3	21,896	32,116	54,012	4,679	143,945	148,635	1,545	204,193
4	19,032	32,423	51,455	3,789	152,458	156,247	2,098	209,801
5	21,230	31,652	52,883	2,771	129,465	132,236	1,937	187,057
6	31,014	27,904	58,918	1,745	140,751	142,496	1,496	202,912
7	19,008	30,334	49,343	2,880	157,253	160,133	3,353	212,830
8	18,466	37,708	56,175	3,660	135,718	139,378	2,632	198,187
9	25,084	37,555	52,640	4,251	163,727	167,679	1,784	232,403
10	26,514	51,730	78,244	8,425	169,643	178,068	3,067	259,381
11	25,382	45,941	71,323	8,830	163,712	172,542	2,339	246,205
12	23,815	45,662	69,478	8,058	163,295	171,353	2,239	243,071
13	21,715	50,278	71,994	3,475	135,912	139,387	3,108	214,491
26	2,190	9,073	11,264	446	23,007	23,453	396	35,115
27	3,258	14,183	17,441	423	23,813	24,237	371	42,050
28	3,690	20,885	23,976	625	43,148	43,773	171	67,921
29	3,039	14,630	17,670	486	32,371	32,857	247	50,775
30	2,874	16,947	19,821	577	36,292	36,870	418	57,110
31	3,252	16,006	19,259	570	28,620	29,190	463	48,913
32	4,478	16,552	21,030	499	32,414	32,914	578	54,522
33	4,704	16,336	21,041	647	23,884	24,532	623	46,197
34	7,268	18,829	26,098	584	32,069	32,564	629	59,382
35	7,504	22,237	29,742	688	46,255	46,943	646	77,332
36	8,090	25,392	33,482	816	37,686	38,502	674	72,659
37	6,768	26,814	33,583	835	37,149	37,985	1,148	72,717
38	5,391	25,806	31,197	718	32,820	33,538	1,338	66,074
39	5,805	26,606	32,411	783	31,389	32,172	1,305	65,889
40	5,749	30,164	35,914	594	25,734	26,329	1,256	63,499

付　録Ⅱ　農産物消費額合計

（単位：百万円）

	食用直消	食用加工	食用計	工業用	食用・工業用計	農業投入用	総計
明治 42	803,545	361,151	1,164,696	103,765	1,268,461	53,124	1,321,585
43	836,684	363,431	1,200,115	107,312	1,307,427	44,517	1,351,944
44	933,018	370,668	1,303,686	123,922	1,427,068	54,839	1,482,447
大正 1	922,608	393,367	1,315,975	129,857	1,445,832	54,064	1,499,896
2	956,213	401,511	1,357,724	134,718	1,492,442	66,905	1,559,347
3	997,511	403,982	1,401,493	135,414	1,536,907	56,988	1,593,895
4	994,560	383,580	1,378,140	154,692	1,532,832	69,346	1,602,178
5	997,777	416,362	1,414,103	168,562	1,582,665	72,409	1,655,074
6	973,829	460,549	1,434,378	179,989	1,614,367	82,176	1,696,543
7	1,065,880	512,923	1,578,803	210,149	1,788,952	96,210	1,885,162
8	1,129,489	553,216	1,682,705	226,852	1,909,557	110,919	2,020,476
9	1,090,513	592,181	1,682,694	222,470	1,905,164	92,665	1,997,829
10	1,019,505	536,761	1,556,266	208,965	1,765,231	98,802	1,864,033
11	1,123,994	621,299	1,745,293	218,508	1,963,801	97,829	2,061,630
12	1,031,751	640,037	1,671,788	225,914	1,897,702	105,611	2,003,313
13	1,107,947	637,089	1,745,036	209,400	1,954,436	100,124	2,054,570
14	1,138,369	632,438	1,770,807	239,671	2,010,478	95,132	2,105,610
昭和 1	1,192,461	627,947	1,820,408	290,411	2,110,819	109,955	2,220,774
2	1,132,892	618,895	1,751,787	282,594	2,034,381	105,951	2,140,332
3	1,147,785	627,941	1,775,726	290,806	2,066,532	99,220	2,165,752
4	1,236,645	645,135	1,881,780	320,144	2,201,924	94,907	2,296,831
5	1,085,335	619,066	1,704,401	336,638	2,041,039	96,606	2,137,645
6	1,192,068	609,334	1,801,402	341,396	2,142,798	106,390	2,249,188
7	1,049,069	589,566	1,638,635	358,110	1,996,645	84,214	2,080,859
8	1,342,753	611,586	1,954,339	409,239	2,363,578	79,536	2,443,114
9	1,057,501	647,549	1,705,050	423,187	2,128,237	86,927	2,215,164
10	1,276,506	658,974	1,935,480	434,891	2,370,371	82,238	2,452,609
11	1,378,722	690,345	2,069,067	459,298	2,528,365	96,274	2,624,639
12	1,355,805	709,556	2,065,361	480,393	2,545,754	92,843	2,638,597
13	1,318,985	715,127	2,034,112	403,145	2,437,257	99,476	2,536,733
26	1,396,030	560,827	1,957,057	262,421	2,219,478	65,990	2,285,468
27	1,391,970	637,097	2,029,067	304,108	2,333,175	67,955	2,401,130
28	1,313,076	764,131	2,077,207	350,420	2,427,627	70,223	2,497,850
29	1,402,674	818,117	2,220,791	354,958	2,575,749	78,978	2,654,727
30	1,633,163	902,622	2,535,785	359,404	2,895,189	91,769	2,986,958
31	1,608,653	938,173	2,546,826	429,620	2,976,446	92,429	3,068,875
32	1,661,565	1,006,253	2,667,818	459,654	3,127,472	106,755	2,234,227
33	1,706,649	1,074,810	2,781,459	406,395	3,187,854	116,859	3,304,713
34	1,579,381	1,166,072	2,345,453	446,812	3,192,265	128,303	3,320,568
35	1,687,629	1,281,822	2,969,451	494,372	3,463,823	148,113	3,611,936
36	1,831,696	1,420,596	3,252,292	535,256	3,787,548	172,175	3,959,723
37	1,845,620	1,594,566	3,440,186	516,196	3,956,382	190,358	4,146,740
38	2,030,230	1,764,008	3,794,238	524,212	4,318,450	208,536	4,526,986
39	2,052,663	1,875,668	3,928,331	545,862	4,474,193	237,421	4,711,614
40	2,049,307	1,944,978	3,994,285	568,979	4,563,264	252,330	4,815,594